

## 石川啄木・節子夫妻の出典付き年譜の作成

著者	水野 信太郎
雑誌名	北翔大学北方圏学術情報センター年報 = Bulletin of Northern Regions Academic Information Center, Hokusho University
巻	12
ページ	89-100
発行年	2020
URL	<a href="http://doi.org/10.24794/00003296">http://doi.org/10.24794/00003296</a>

## 研究報告

## 石川啄木・節子夫妻の出典付き年譜の作成

水野信太郎

北翔大学生涯スポーツ学部スポーツ教育学科

## 抄 録

本研究は石川啄木と妻節子（堀合セツ）夫妻と、啄木の両親（石川一禎、工藤カツ）ならびに姉妹（田村サダ、山本トラ、三浦ミツ）の年譜を、出来事ごとに出典を明らかにしながら作成しようとする試みである。啄木に関する記録としては、日記や書簡ほかの歴史的資料が数多く公刊されている。このため場所、年月日を含めて彼の動きを知ることが出来る。それらの記述を根拠として石川啄木、節子夫妻の出典付き年譜を作成する。この小さな試みによって、今後の啄木研究の新しい展開を期待する。

キーワード：石川一禎、工藤カツ、工藤一、堀合セツ、国際啄木学会、啄木研究

## I. はじめに

本稿は日本近代を代表する歌人であり、明治期の庶民生活を同時代人として記録した石川啄木（いしかわ・たくぼく、本名は一：はじめ、1886～1912）に関する基礎的研究の一試行である。啄木（本稿では便宜的に当該文字を使用する。以下同様）の生涯は広く知られており、このため公刊されている年譜は相当数にのぼる。しかもそれらの内容の多くが、詳細な日付と共に掲載されている。つまり彼がさまざまな行動を起こしたとされる年月日が、明記されているのである。

しかしながら一歩立ち止まって再考するに、今日では当たり前のこととして半ば通念の如く受け入れられているそれらの日時は、どのような裏付けによって記載されているのであろうか。この基本的な問いかけに即答することは、多くの人々にとって容易なことではないだろう。上記のような素朴な疑問から出発して、管見ながら現時点で可能な限りの出典を照らし合わせる試みが本研究である。

## II. 背景

筆者は常々、文学者にとって、生い立ちの地と家庭および生活の基盤である住宅から受ける影響は大きい、と感じている。同様に文学作品において、背景となる都市あるいは集落や舞台である建築物は、作品自体の重要な

要素である<sup>1)</sup>と考えてきた。この視点から筆者個人の研究主題に過ぎないものの、啄木家族がどこに住まい、どのような光景を目にしてきたのかが大きな関心事であった。周知の通り、啄木一家は流浪の生活を強いられる。よく知られる通り、一家離散とはこれなるべし<sup>2)</sup>という状況であった。

当然のことながら家族の住所が一箇所ではなくなる。また度重なる転居生活によって、移転先の数も随時増えていく。そのような背景のもと、筆者としては、啄木家族の住所を正確に理解しておく必要を感じてきた。いつ、家族の誰が、どこに住んでいたのかを整理しておきたいものである。そのために家族の年譜を作成すると同時に、出典を確かめておく必要を痛感したのである。

文学史の分野ではないが、筆者は幾編かの年表<sup>3)</sup>を作成してきた経験がある。歴史研究を継続していると、巷間で伝えられてきた事項に出会う経験も多々ある。その世界の人々の間で聞かされる伝承に近いものである。けれども作成者自身の名を掲げ、自らの責任を明示した上で年表ないし年譜を発表する場合には、少なくとも各事項には必ず根拠が存在するはずである。

そのような年譜に毎回、出典を明示することは、発表する紙面の制約上から現実的には不可能であろう。だが年譜作成者側の研究態度としては、必ずしも無意味な行為ではないと考えられる。さらに筆者のみの1名に限定される問題をも超えて、出典付き年譜を作成し多くの方々が目にするのが可能となる状態は、斯界の研究を進めるに際して大きな意義のあることだとも思い至っ

た。このような研究態度は、その後の研究の精度を高めることにも繋がる意義深い行為であろう。

### Ⅲ. 方 法

本研究においては、まず略年譜と題されたものも含めて石川啄木の関連年譜を広く渉猟する作業から始める。そののちに出典として扱うことに耐えられると思しき文献、資料類を各出来事の根拠として掲げる（「表－2 啄木・節子夫妻文献リスト」参照）。

年譜作成の際、裏付けとして採用し明記した出典には、石川啄木ならびに堀合節子に直接会っている人物たちが著した書籍類も含まれる。一方で彼らと生前に面会して話を交わすことは叶わなかった人々がまとめた資料も少なくない。それらの文献からは、証言という形だけではなく、写真などの映像資料をもって、当研究における年譜項目の月日を特定する根拠とする場合もあった。とりわけ石川家の戸籍、直筆の履歴書、就学時の保証人届け出書類あるいは保証人変更届を撮影した写真などは、生年月日だけでなく、その時点での各人の住所ほかを年譜中に掲げるための有力な根拠となった。今後可能な限り有効に活用したい。勿論それらの出典に関しては、筆者なりに資料批判を加えた上で根拠として採用するか否かの判断をくだすこととした。

石川啄木に関しては、その文芸作品だけでなく、彼の実人生そのものが早くから研究対象とされてきた。そのおかげで多くの文学アルバムなど、写真版による映像資料を今日わたくしどもが広く目にし得るという望ましい現実を迎えている。この状況は研究者にとっては勿論のこと、大衆にとっても、おそらく啄木一家にとっても幸運であった。その理由は、明治という世界史においても特異な時期を、貧困と病苦の中にあっても愛と情熱を燃やし続けながら駆け抜けた青年<sup>4)</sup>の史実を、社会全体が知る機会を支えてくれるからである。

除籍を得たい時に、戸籍関係証明書等の請求書に「子の子の子」などと、本人との続柄を明記して申請することが出来る者は限られている。子孫以外は入手することができない書類の原本を、写真という形ではあっても研究者ほかが確認することが出来る状況は極めて幸いである。特に現今では、個人情報保護という新たな趣旨を掲げた公務（公共事業）の創出に伴う法律の制定によって、昨今より一層の制約が加えられた。啄木とその家族に関わる書類原本の写真資料は、本研究における重要な出典として扱うことが出来る。

筆者個人の問題意識に基づく研究テーマについても、写真類はきわめて重要な資料となる。具体的には、啄木の住まいと家族の居住地を知るための根拠である。啄木



図－1 盛岡高等小学校時代の石川一



図－2 中学を辞して上京する啄木

表－1 石川啄木・節子夫妻の年譜

年月日	一禎	カツ	啄木	節子	サダ	トラ	ミツ
弘化4年2月4日 1847年		工藤家の四女として誕生 ①P111 ②P23					
嘉永3年4月8日 1850年	石川家に誕生 ③P16 ④P82 幼名は宗次郎そ うじろう④P82 ⑤P139⑥P293						
嘉永7年2月15日 1854年	5歳で平館村の 大泉寺に出され る ⑤P139 ⑥P293						
慶応2年1月 1866年	大泉寺に転住し てきた葛原対月 の弟子となる ⑤P139						
明治4年1月以降 1871年	盛岡の龍谷寺へ 対月を慕い行 く。のちにカツ と出会う④P16	兄が転住した盛 岡の龍谷寺で、 一禎と出会う ④P16					
旧暦明治7年12月25日 新暦1875年3月3日	常光寺の住職、 二人暮らしが始 まる ⑥P302	一禎と共に常光 寺へ転居 ⑥P302					
明治9年8月2日 1876年	三人暮らしが始 まる ①P111 ②P23	長女サダを出産 する ①P111 ②P23			工藤カツの長女 として誕生 ①P111 ②P23		
明治11年11月1日 1878年	四人暮らしが始 まる ①P111 ②P24	次女トラを出産 する ①P111 ②P24				工藤カツの次女 として誕生 ①P111 ②P24	
明治19年2月20日 1886年	五人暮らしが始 まる ①P111 ⑩P13	長男、一を出産 する ①P111 ⑩P13	2月2日、工藤 カツの第三子長 男として常光寺 で誕生 ①P111 ⑩P13 ⑪P5				
明治19年10月14日 1886年				堀合忠操・トキ の第一子長女と して盛岡郊外の 新山小路（現在 の盛岡市上田） で誕生 ①P111 ⑩P27 ⑫P15			
明治20年旧暦3月6日 1887年	宝徳寺の住職に 転出 ⑦P57 ⑬P14	浜民村へ転居 ⑬P14	浜民村へ転居 ⑬P14		浜民村へ転居 ⑬P14	浜民村へ転居 ⑬P14	
明治21年12月20日	六人暮らしが始 まる（但しサダ は盛岡在住か） ②P24 ③P16 ⑭P1	三女ミツを出産 する ②P24 ③P16 ⑭P1					工藤カツの三女 として宝徳寺で 誕生 ②P24③P16 ⑭P1
明治24年5月2日 1891年			浜民尋常小学校 入学 ①P113 ⑨P9 ⑮P15		この年に田村叶 と結婚 ⑤P128		
明治28年3月 1895年			岩手郡浜民尋常 小学校を卒業 ⑯P16 ⑰P418				
明治28年4月2日 1895年	妻と娘二人の暮 らし（但しトラ は盛岡か） ①P114 ⑨P11 ⑯P75	夫と娘二人の暮 らし（但しトラ は盛岡か） ①P114 ⑨P11 ⑯P75	盛岡高等小学校 に入学。盛岡市 仙北町組町44番 戸の工藤常象方 に住む ①P114 ⑨P11 ⑯P75				
明治29年早春 1896年			上記の住所から 盛岡市開運橋通 の海沼イエ方に 移る ⑱P1				
明治29年春 1896年			上記の住所から 盛岡市大沢川原 小路35番戸の海 沼ツエ方に移る ⑱PP. 1-2			この年に山本千 三郎と結婚 ⑤P131	

石川啄木・節子夫妻の出典付き年譜の作成

年月日	一禎	カツ	啄木	節子	サダ	トラ	ミツ
明治31年 4月25日 1901年			岩手県盛岡尋常 中学校へ入学				
明治32年 7月14日以降 1899年			東京市上野の次 姉夫妻宅に逗留 ⑤P132			夫は上野駅助役 勤務⑤P132	
明治33年 1月 1900年			上記の住所から 盛岡市帷子小路 5番戸の田村叶 方に移る ⑩P1	明治32年あるい は同33年に、啄 木と出会う ⑫P37	左の住所で啄木 と住む ⑨P1		
明治34年10月 1901年			上記の住所から 盛岡市長町の田 村叶方に移る ⑩P1		上の住所から左 記へ転住 ⑨P1	この年に夫が余 市駅長 ⑤P132	
明治34年10月 6日 1901年			上記の住所から 盛岡市四ツ家町 27, 長屋の田村 叶方に移る ⑩P1		上の住所から左 記へ転住 ⑨P1		
明治34年11月 1901年			上記の住所から 盛岡市仁王小路 30番戸の田村叶 方に移る ①P122 ⑨P1		上の住所から左 記へ転住 ⑨P1		
明治35年10月 1日 1902年			『明星』に初め て短歌が掲載さ れる ⑩P425				
明治35年10月27日 1902年			岩手県立盛岡中 学校を退学 ⑩P425				
明治35年10月31日 1902年	妻と三女との三 人暮らし ②P7	夫と三女との三 人暮らし ②P7	上京するために 盛岡を發つ ②P7	盛岡駅で啄木を 見送る ②P7			両親と自分の三 人暮らし ②P7
明治35年11月 2日			小石川の知人宅 を経て、小石川 区小日向台3丁 目93, 大館光方 に住む ⑨P20 ②P8				
明治36年 2月27日 1903年	東京から啄木を 宝徳寺へ連れ帰 る ②P25	病の啄木を迎え る ②P25	東京生活で病を 得、父に連れら れて故郷へ帰る ②P25				両親と兄との四 人暮らし ②P25
明治37年 3月31日 1904年				結婚が決まり、 滝沢村立篠木尋 常小学校代用教 員、そのため山 崎廉平宅に寄宿 ⑩P27 ⑫P48		この年に夫が小 樽中央駅長着 任。秋、啄木来る ⑤P132	
明治37年10月31日 1904年	妻と三女との三 人暮らし ①P126 ⑩P429 ②P74	夫と三女との三 人暮らし ①P126 ⑩P429 ②P74	2回 目 の 上 京 で、本郷区向ヶ 丘弥生町3の村 井方に住む ①P126 ⑩P429 ②P74		この年に秋田県 の小坂銅山へ転 居 ⑤P129		両親と自分の三 人暮らし ①P126 ⑩P429 ②P74
明治37年11月 8日 1904年			上記の住所から 神田区駿河台袋 町8 養精館に転 住 ⑩P429 ②P76				
明治37年11月28日 1904年			上記の住所から 牛込区砂土原町 3丁目21番地の 井田芳太郎方 に移る ⑩P429 ②P77				
明治37年12月26日 1904年	宝徳寺の住職を 罷免される。 ⑨P27		父の失職を知ら ず、経済的負担 を負う ⑨P27				
明治38年 3月 2日 1905年	宝徳寺を退去し て洪民村芋田第 8地割53番地の 竹田久之助方 に移る ⑫P53 ⑩P430	宝徳寺を退去し て洪民村芋田第 8地割53番地の 竹田久之助方 に移る ⑫P53 ⑩P430					宝徳寺を退去し て洪民村芋田第 8地割53番地の 竹田久之助方 に移る ⑫P53 ⑩P430



年月日	一禎	カツ	啄木	節子	サダ	トラ	ミツ
明治38年 3月10日 1905年			上記の住所から 牛込区払方町25 大和館に移る ⑰P429 ⑳P85				
明治38年 3月 1905年				滝沢村立篠木尋 常小学校代用教 員を辞して、実 家に戻る ⑳P49			
明治38年 4月25日 1905年	上記の住所から 盛岡市帷子小路 5番戸の佐藤方 に移る ⑳P53	上記の住所から 盛岡市帷子小路 5番戸の佐藤方 に移る ⑳P53					上記の住所から 盛岡市帷子小路 5番戸の佐藤方 に移る ⑳P53
明治38年 5月 3日 1905年			詩集『あこがれ』 出版 ㉑奥付				
明治38年 5月12日 1905年	上記の住所から 盛岡市帷子小路 8番戸（新婚の 家）に移る ⑳P55	上記の住所から 盛岡市帷子小路 8番戸（新婚の 家）に移る ⑳P55					上記の住所から 盛岡市帷子小路 8番戸（新婚の 家）に移る ⑳P55
明治38年 5月30日 1905年	新郎不在の結婚 式 ⑰P107 ⑳P57	新郎不在の結婚 式 ⑰P107 ⑳P57	結婚式に列席せ ず ⑰P107 ⑳P57	夫不在の結婚式 ⑰P107 ⑳P57			新郎不在の結婚 式 ⑰P07 ⑳P57
明治38年 6月 4日 1905年	上記の家に啄木 を迎える ⑳P61	上記の家に啄木 を迎える ⑳P61	盛岡市帷子小路 8番戸の家に着 く ⑳P61	上記の家に啄木 を迎える ⑳P61			上記の家に啄木 を迎える ⑳P61
明治38年 6月25日 1905年	盛岡市加賀野磧 町4番戸へ転居 ⑳P84	盛岡市加賀野磧 町4番戸へ転居 ⑳P84	盛岡市加賀野磧 町4番戸へ転居 ⑳P84	盛岡市加賀野磧 町4番戸へ転居 ⑳P84			盛岡市加賀野磧 町4番戸へ転居 ⑳P84
明治38年 9月 5日 1905年	『小天地』を発 行 ⑰P431 ㉑奥付		『小天地』を発 行 ⑰P431 ㉑奥付	『小天地』に作 品が掲載される ㉑P19			
明治39年 2月16日 1906年	青森県の野辺地 が浜の常光寺に 住み、21日函館 帰りの啄木と会 う ⑰P432		函館の次姉夫妻 を訪ねる ⑰P432			夫は函館駅長、 函館にて啄木を 迎える ⑰P432	
明治39年 2月25日 1906年	長女を失なう ⑳P77	長女を失なう ⑳P77	長姉を失なう ⑳P77	義姉を失なう ⑳P77	小坂で病没、享 年31 ⑰P77	姉を失なう ⑰P77	長姉を失なう ⑰P77
明治39年 3月 4日 1906年	青森県の野辺地 が浜の常光寺に 住み続ける ⑰P64	渋民村の齊藤ト メ方の表座敷へ 転出 ⑰P64	渋民村の齊藤ト メ方の表座敷へ 転出 ⑰P64	渋民村の齊藤ト メ方の表座敷へ 転出 ⑰P64			盛岡女学校の女 教師の家に住む ⑰P64
明治39年 4月11日 1906年	上記の常光寺か ら4月10日に齊 藤トメ方へ帰宅 ⑰P94	夫を迎え、四人 暮らし ⑰P94	渋民尋常高等小 学校の代用教員 辞令を受ける ⑰P94	義父を迎え、四 人暮らし ⑰P94			盛岡から渋民へ 帰宅し再び盛岡 ⑰P91
明治39年 6月10日 1906年			父の再住運動に 上京し千駄ヶ谷 新詩社に滞在 ⑰P101				
明治39年11月17日 1906年				出産のため盛岡 の実家へ帰る ⑰P114			
明治39年12月29日 1906年			父親となる。 ⑰P123	実家で長女・京 子を生む ⑰P123 ⑱P128			
明治40年 3月 5日 1907年	青森県の野辺地 が浜の常光寺へ 家出 ⑰P145			京子連れて実 家から渋民村へ 帰宅 ⑰P145			
明治40年 5月 4日 1907年	父は野辺地にあ り ⑰P150	武道の米田氏方 1室を借りて移 る ⑰P435 ⑰P150	妹を連れて、渡 道。自分は函館 へ ⑰P435 ⑰P150	京子と共に、盛 岡の実家へ ⑰P435 ⑰P150			啄木と共に渡 道、小樽へ向か う ⑰P150
明治40年 5月 5日 1907年			妹と別れ函館区 青柳町45番地に 住む ⑰P435 ⑰P154			やがて妹ミツを 小樽にて迎える ⑰P132	啄木と別れて、 小樽へ向かう ⑰P435
明治40年 7月 7日 1907年			青柳町18番地ラ の4号で妻子と 暮らす ⑰P436 ⑰P155	京子と共に盛岡 から函館へ転居 ⑰P436 ⑰P155			

石川啄木・節子夫妻の出典付き年譜の作成

年月日	一禎	カツ	啄木	節子	サダ	トラ	ミツ
明治40年 7月 1 週間後 1907年			上記の住所から 18番地む 8号に 移る ⑩P436 ⑩P156	上記の住所から 18番地む 8号に 移る ⑩P436 ⑩P156			
明治40年 8月 3・4日 1907年	野辺地で啄木に 会う ⑩P436 ⑩P156	野辺地から函館 へ ⑩P436 ⑩P156	母を函館へ迎え る ⑩P436 ⑩P156	カツを迎える ⑩P436 ⑩P156			小樽から函館へ 転地 ⑩P156
明治40年 9月13日 1907年		啄木を送り出す ⑩P163	函館から札幌へ 転出 ⑩P437 ⑩P164	啄木を見送る ⑩P164			啄木を見送る ⑩P164
明治40年 9月14日 1907年		9月18日小樽に 仮住まい ⑩P166	北7条西4ノ4 田中方に同宿 ⑩P164	9月18日小樽に 仮住まい ⑩P166		母と妹と義妹を 小樽へ迎える ⑩P166	9月18日小樽に 住む ⑩P166
明治40年 9月27日 1907年			札幌から小樽へ 転出 ⑩P437 ⑩P169			さらに啄木も迎 える ⑩P437 ⑩P169	
明治40年10月 2日 1907年		小樽市花園町14 西沢善太郎方に 転居 ⑩P170	小樽市花園町14 西沢善太郎方に 転居 ⑩P170	小樽市花園町14 西沢善太郎方に 転居 ⑩P170		母と啄木夫妻は 左記へ転居 ⑩P170	姉トラ宅に住む ⑩P170
明治40年11月 6日 1907年		小樽区花園町畑 14番地に転居 ⑩P437 ⑩P176	小樽区花園町畑 14番地に転居 ⑩P437 ⑩P176	小樽区花園町畑 14番地に転居 ⑩P437 ⑩P176			この頃、札幌の 村山宅で手伝い ⑩P94
明治41年 1月19日 1908年		釧路へ単身で赴 任する啄木を送 り出す ⑩P208	小樽から札幌を 経て岩見沢の姉 宅に宿泊 ⑩P439 ⑩P208	小樽駅で啄木を 見送る ⑩P208		啄木を岩見沢の 駅長官舎に迎え る ⑩P439 ⑩P208	岩見沢の姉宅か ら札幌へ帰る ⑩P208
明治41年 1月20日 1908年			岩見沢を発ち旭 川に泊まる ⑩P439 ⑩P208			朝10時ころ啄木 を送り出す ⑩P439 ⑩P208	
明治41年 1月21日 1908年			旭川を発って釧 路着 ⑩P439 ⑩P209				
明治41年 1月23日 1908年			洲崎町1丁目の 関下宿に移る ⑩P439 ⑩P209				
明治41年 1月27日前 1908年	2月4日以前に 野辺地より啄木 へ手紙を書く ⑩P211	小樽市花園町4 番の中、星川丑 七方へ転居 ⑩P209	釧路の上記宅で 一人暮らし ⑩P209	小樽市花園町4 番の中、星川丑 七方へ転居 ⑩P209			
明治41年 2月29日前 1908年		上記の住所で三 人暮らし ⑩P223	釧路滞在40日 ⑩P223	上記の住所で三 人暮らし ⑩P223		啄木に手紙を書 く ⑩P223	病気で札幌から 小樽へ転居中 ⑩P223
明治41年 4月 4日 1908年			釧路を海路で離 れる ⑩P440 ⑩P244				
明治41年 4月 7日 1908年			函館に着 ⑩P440 ⑩P245				
明治41年 4月13日 1908年		上記の家で啄木 を迎える ⑩P247	函館を発って小 樽 ⑩P247	上記の家で啄木 を迎える ⑩P247			
明治41年 4月19日 1908年		小樽を引き払っ て函館へ ⑩P247	小樽を発って函 館 ⑩P247	小樽を発って函 館 ⑩P247			
明治41年 4月24日 1908年		函館栄町232鈴 木方2階にて三 人暮らし ⑩P247	函館から海路で 横浜へ ⑩P248	函館栄町232鈴 木方2階にて三 人暮らし ⑩P247			
明治41年 4月28日 1908年			横浜港着。鉄道 にて新橋駅を経 て千駄ヶ谷の東 京新詩社 ⑩P440 ⑩P251				
明治41年 5月 4日 1908年			本郷菊坂町82の 赤心館へ転居、 この夜は金田一 ⑩P257				
明治41年 5月 5日 1908年			赤心館2階の6 畳間「自分の 室」へ移る ⑩P257				

年月日	一禎	カツ	啄木	節子	サダ	トラ	ミツ
明治41年9月6日 1908年			森川町1番地新坂359蓋平館へ転居この夜は金田一の室に泊まる ②P322				
明治41年9月8日 1908年			蓋平館3階の九番の室に移る ②P324				
明治42年3月1日 1909年			東京朝日新聞社の校正係に当社 ①P442 ②P32				
明治42年6月15日 1909年			本郷区弓町2丁目18番地に荷物この夜は金田一 ②P173				
明治42年6月16日 1909年		宮崎郁雨に伴われて上京 ①P442 ②P173	母と妻子を迎え、上記で一緒に住む ①P442 ②P173	宮崎郁雨に伴われて上京 ①P442 ②P173			
明治42年10月2日 1909年		啄木と二人暮らし ①P442 ②P285	妻の家出に狼狽える ①P442	無断で盛岡の実家へ帰る ②P285			
明治42年10月26日 1909年		四人暮らし立場は弱まる ①P443	妻の家出後は姿勢が改まる ①P443	盛岡の実家から東京へ帰宅 ①P443			
明治42年12月20日 1909年	野辺地から上京する ①P443 ②P289	夫を迎える ①P443 ②P289	両親、妻子と暮す ①P443 ②P289	五人暮らし、翌年末は六人暮らし ②P289 ③巻頭P(7)			
明治43年4月 1910年							名古屋の聖使女学院④P102
明治43年12月1日 1910年	長男が『一握の砂』を出版 ③奥付	長男が『一握の砂』を出版 ③奥付	歌集『一握の砂』を出版 ③奥付	夫が『一握の砂』を出版 ③奥付			
明治44年7月				東大の内科で診察をうけ肺の疾患が判明する ②P216			旭川 ①P450 ②P217
明治44年8月7日 1911年	小石川区久堅町74の46号へ転居 ①P450 ②P217	小石川区久堅町74の46号へ転居 ①P450 ②P217	小石川区久堅町74の46号へ転居 ①P450 ②P217	小石川区久堅町74の46号へ転居 ①P450 ②P217			
明治44年8月10日 1911年	上記で六人暮らし ②P217	三女の上京まで家事を担当 ②P217	自身の病は小康状態 ②P217	家事をすることが出来ない病状 ①P450 ②P217			先月から旭川にいたが上京 ①P450 ②P217
明治44年9月3日	小樽の次女夫婦宅へ家出 ①P450 ②P218	上記で五人暮らし ②P218	上記で五人暮らし ②P218	上記で五人暮らし ②P218	夫は手宮駅長、父を迎える ⑤P133 ②P218		東京で五人暮らし ②P218
明治44年9月14日 1911年		上記で四人暮らしに戻る ①P450	上記で四人暮らしに戻る ①P450	上記で四人暮らしに戻る ①P450			旭川へ帰る ①P450
明治44年10月29日			旭川のミツから手紙が届く ②P218				兄へ手紙投函 ②P218
明治45年3月7日 1912年		死去、享年66歳 ②P23 ①P452	母を失ない妻子と三人暮らし ②P23 ①P452	義母を失ない夫と娘との三人暮らし ②P23 ①P452			
明治45年4月5日 1912年	次女夫婦と室蘭に転じていたが上京 ①P452		四人暮らし ①P452	四人暮らし ①P452	当時の夫は室蘭勤務 ⑤P133		
明治45年4月13日	長男を失なう ③P33		朝9時30分死去 ③P33	幼子を抱えて妊婦で寡婦になる ③P33	弟を失なう ③P33		兄を失なう ③P33
明治45年4月22日 1912年	室蘭の次女宅へ帰る ②P184			長女と二人暮らし ②P184	父を迎える ②P184		
明治45年5月1日 1912年				東京を引き払って房州へ転居 ②P187			
明治45年6月14日 1912年				次女、房子を生む ②P341			
明治45年6月20日 1912年			歌集『悲しき玩具』出版 ④奥付	三人暮らし ②P341			



石川啄木・節子夫妻の出典付き年譜の作成

年月日	一禎	カツ	啄木	節子	サダ	トラ	ミツ
大正元年 8 月 15 日 1912 年				房州から盛岡へ 移る ⑫P341			
大正元年 9 月 4 日 1912 年				函館到着、青柳 町 32 番地に住む ⑫P341			
大正 2 年 5 月 5 日 1913 年				市内の豊川病院 で死去 ⑫P342			
大正 12 年 1913 年							三浦清一と結婚 ②P24
昭和 2 年 2 月 20 日 1927 年	高知駅長官舎で 死去、享年 78 ⑤P133					夫は高知駅長在 勤 ⑤P133	
昭和 4 年 1929 年						滋賀へ転居 ⑤P133	
昭和 20 年 2 月 14 日 1945 年						死去、享年 68 ②P24 ⑤P133	
昭和 43 年 10 月 21 日 1968 年							死去 享年 81 ②P24

表-2 啄木・節子夫妻文献リスト

① 『現代日本文学アルバム 第 4 巻 石川啄木』 桜田満、学習研究社、昭和 49 年 8 月 15 日、年譜 PP. 221-228 戸籍写真あり
② 『啄木の母方の血脈 一新資料「工藤家由緒系譜」に拠る一』 森義真・佐藤静子・北田まゆみ、遊座昭吾、2008（平成 20）年 8 月 7 日改訂版 年譜なし 母と姉妹 PP. 23-24
③ 『啄木寫真帖』 吉田孤羊、改造社、昭和 11 年 6 月 24 日 年譜なし
④ 『啄木ふるさと散歩』 松本政治、盛岡啄木会、昭和 57 年 6 月 12 日 PP. 82-85 父一禎の生涯 P76 生い立ちの間
⑤ 『啄木 ふるさと人との交わり』 森義真、盛岡出版コミュニティー、2014 年（平成 26）3 月 28 日 P120 齊藤トメ
⑥ 『日本文学研究資料叢書 石川啄木』 日本文学研究資料刊行会、有精堂出版、昭和 45 年 7 月 30 日 P258 金田一京助 P292 血統 PPP. 307-311 誕生日
⑦ 『啄木を繞る人々』 吉田孤羊、改造社、昭和 4 年 5 月 10 日、P-55 には一禎が 16・17 歳の時とある。また P94 誕生日 年譜なし
⑧ 『啄木歌抄』 金田一京助、青磁社、昭和 21 年 6 月 20 日 年譜なし
⑨ 『新潮日本文学アルバム 6 石川啄木』 岩城之徳、新潮社、1984 年 2 月 20 日 年譜 PP. 104-108 PP. 7-8 戸籍写真あり
⑩ 『石川啄木入門』 岩城之徳、思文閣出版、平成 4 年 11 月 1 日 年譜 PP. 142-146 節子 P27
⑪ 『新編 人間啄木』 伊東圭一郎、岩手日報社、昭和 49 年 1 月 1 日 改版 P5 明治 18 年生まれ明記 P3 と P12 開運橋の海沼家 P58 啄木の部屋は下の 6 畳（仁王小路）
⑫ 『啄木の妻節子』 堀合了輔、洋々社、昭和 49 年 5 月 5 日 年譜 PP. 336-342
⑬ 『写真 作家伝叢書 3 石川啄木』 岩城之徳、明治書院、昭和 40 年 6 月 15 日 P12 誕生の間 P22 盛岡市仁王小路 30 番戸 田村叶宅 P34 開運橋 P37 盛岡市四ツ家町 77 長屋 田村宅 P48 新婚の家（大竹新助撮影）PP. 53-54 齊藤トメ P77 小樽区花園町 畑 14 P81 釧路新聞の出典 P88 蓋平館 P101 本郷区森川町 1 新坂蓋平館別荘 P106 『啄木遺稿』 大正 2 年 5 月 25 日発行 P124 千葉県北条町 八幡 P124 節子の死亡時刻 大正 2 年 5 月 5 日午前 6 時 40 分 P143 小石川区久堅町 74 番地 46 号 年譜 PP. 171-173
⑭ 『兄啄木の思い出』 三浦光子、理論社、1964 年 10 月 PP. 215-216 父の事
⑮ 『短歌シリーズ 人と作品 10 石川啄木』 岩城之徳、おうふう、昭和 55 年 4 月 5 日 年譜 PP. 251-262
⑯ 『石川啄木 日本文学アルバム 8』 石川正雄、筑摩書房、1955 年 1 月 15 日 P4 戸籍 P6 生い立ちの間 P12 新婚の家 P14 積町 P17 洪民小学校 P18 齊藤トメ P32-33 小樽の最初 P37 釧路新聞 P46 蓋平館 S29 年 12 月 14 日火災まえ P53 喜之床 P58 久堅町あと 年譜あり 2p
⑰ 『啄木全集 第 8 巻 啄木研究』 石川啄木、筑摩書房、1968 年 2 月 29 日、岩城之徳の手になる伝記的年譜 PP. 417-453
⑱ 『【芸術・・・夢紀行】・・・シリーズ④ 石川啄木 啄木歌集カラーアルバム』 上田博、芳賀書店、1998 年 1 月 20 日 年譜 PP. 139-145

- ⑲ 『盛岡啄木・賢治「青春の記憶」探求地図』文化地層研究会，文化地層研究会，平成16年9月21日
- ⑳ 『啄木・道造の 風かほる盛岡』山崎益矢，文芸社，2001年4月13日
- ㉑ 『啄木全集 第5巻 日記（一）』石川啄木，筑摩書房，1967年11月25日
- ㉒ 『啄木全集 第7巻 書簡』石川啄木，筑摩書房，1968年4月26日
- ㉓ 『新體詩集 あこがれ』石川啄木，小田島書房，明治38年5月3日。『特選 名著復刻全集 近代文学館 あこがれ』同全集近代文学館・編集委員会，日本近代文学館，昭和46年5月10日
- ㉔ 『別冊太陽 日本のこころ195 石川啄木 漂泊の詩人』湯原公浩，平凡社，2012年5月24日
- ㉕ 『小天地 第壹巻 第壹號』石川啄木，石川一禎，明治38年9月5日。『完全復刻版 小天地』ノーベル書房，ノーベル書房，昭和52年10月15日
- ㉖ 『啄木と函館』阿部たつを，幻洋社，1988年6月10日
- ㉗ 『回想の石川啄木』岩城之徳，八木書店，昭和42年6月20日 年譜PP. 465-484
- ㉘ 『啄木と洪民』遊座昭吾，八重岳書房，昭和46年6月15日 巻頭グラビアに年賀状
- ㉙ 『啄木全集 第6巻 日記（二）』石川啄木，筑摩書房，1967年12月25日
- ㉚ 『カラーブックス341 名作の旅7 石川啄木』大竹新助，保育社，昭和50年11月5日，P-97に本郷時代の喜之床写真がある。
- ㉛ 『一握の砂』石川啄木，東雲堂書店，明治43年12月1日。『新選 名著復刻全集 近代文学館 一握の砂』同復刻全集編集委員会，日本近代文学館，昭和59年7月1日』
- ㉜ 『現代教養文庫480 東京の散歩道 一明治・大正のおもかげー』窪川鶴次郎，社会思想社，昭和39年8月15日 PP. 102-105啄木臨終の地
- ㉝ 『牧水写真帖』大悟法利雄，新声社，昭和43年10月17日，に啄木の死を知らせる牧水自筆書写真がある。
- ㉞ 『歌集悲しき玩具』石川 一，東雲堂書店，明治45年6月20日。『石川啄木記念館 名著復刻シリーズ 第2弾 石川啄木著 悲しき玩具 東雲堂書店版』盛岡市・石川啄木記念館，盛岡市・石川啄木記念館，平成19年10月14日。
- ㉟ 『大阪啄木通信 26号』天野 仁，高槻市，2005年5月，全19ページ中に齊藤トメ宅の正確な表記あり。

#### 復刻版シリーズ

『新體詩集 あこがれ』石川啄木，小田島書房，明治38年5月3日。特選 名著復刻全集近代文学館 石川啄木 あこがれ 小田島書房版，日本近代文学館 刊行，昭和46年5月10日より

『小天地 第壹號 第壹巻』石川一 編輯，小天地社 発行，明治38年9月5日。完全復刻版 小天地，ノーベル書房，昭和52年10月15日より 年譜あり「石川啄木と雑誌『小天地』（解説）」に年譜

『一握の砂』石川啄木，東雲堂書店，明治43年12月1日。新選 名著復刻全集 近代文学館 石川啄木著 一握の砂 東雲堂書店版，日本近代文学館 発行，昭和59年7月1日より

『歌集 悲しき玩具（一握の砂以後）』石川 一，東雲堂書店，明治45年6月20日。石川啄木記念館 名著復刻シリーズ 第2弾，盛岡市 発行，平成19年10月14日より

ら家族が交わした郵便葉書を含む書簡類の宛て名および差出人の住所を撮影した写真映像は貴重な証拠となる。

しかし明治期の住所表記は今日のそれとは異なっている。このため厳密な意味での出典ではあるものの、後世のわたくしたちからすれば使い勝手に課題も含まれることがあり得る。そのままの住所表記だけでは、現代的な意義が低下しかねないのである。

この場合は作業工程が、ひと手間ふえるが、旧住所を現在の表記に直す作業を研究者が直接しなければならない。あるいは啄木ゆかりのまちの郷土史研究者の助言を仰ぐこととなろう。あらゆる場面でそのような助力を得られるとは限らないので、時としては今日市販されている書籍の中から適宜とりあげて、現住居表示をそのまま採録することで根拠とする場合もあろう。なお今回の年譜では採用しなかったが、現地見学会で訪ねた場所に掲示されている案内板に、地元の教育委員会などの文責による現在地の地名が書かれている事例も少なくない。また地図上において現地を図示している文献なども散見された。

啄木が自作の作品を出版した日付に関しては、その書籍の復刻版あるいは複製版の奥付が根拠となった。たとえば詩集『あこがれ』や歌集『一握の砂』などは、復刻版を手にする機会がある。それら復刻された本の奥付を、年譜の出典とした。既刊の諸研究書を出版するという活動のみならず、文学史上に残る名著を復刻するという先達による行為にも、改めてその偉大なる成果を痛感した。

#### Ⅳ. 結 果

本研究を進めてきた結果、得ることが出来た成果を「表-1 石川啄木・節子夫妻の年譜」として掲げる。同表には左から右方向へ、啄木の父「一禎」、母「カツ」、はじめ自身「啄木」、妻セツ「節子」、長姉「サダ」、次姉「トラ」、妹「ミツ」7人の名を示した。そして表の上ほど年代が遡り、下方に行くにしたがって時系列がくだる。

それぞれの出来事の末尾に出典を明記した。出典となった文献を○に囲まれた数字で示し、当該記述があるページ数を表記している。なお年譜中の各事項に根拠として記載した文献の番号が、重複する番号であることも多々ある。その理由は一冊の文献であっても、異なるページにおいて別の出来事の出典として採用することが可能な場合が見られたためである。

石川啄木という人物は、記録する男であった。記述の人であった。『啄木日記』が具体的な年月日を特定する根拠となった事例は、実に多い。その日記を現在まで残



図-3 婚約当時の啄木と堀合節子



図-4 北海道漂泊時代の石川啄木

すことに尽力した人々の群れがあった。それは妻の節子であり、函館の人々であり、その日記を公刊した出版社と日本社会である。

啄木という人物は研究主題として魅力にあふれている。その大きな理由は、なぞが多いという点にある。彼の行動には両面性が見てとれる。賢いのか、幼いのか、善人なのか、酷薄なのか、よくわからない。判然としないのである。このように相反する正反対の要素が混在し



ていて、その同居理由が不明なのだ。しかし別の見方をすれば、研究テーマが豊富に残されているという事も出来よう。

しかし半面では石川啄木ほどその履歴が、万人の前に明らかとなっている人物も少ないであろう。なぞも多いが、わかっている歴史的な事項も多々ある。基本的な事実が判明しているので、課題である謎を将来的には解き明かしていく余地が多分に存在するのである。

筆者自身は、啄木の父親・石川一禎の人柄に理解不能な領域を嗅ぎとっている。ある意味では「啄木のなぞ」は、父親に起因していたようにも見てとれる。金銭問題で躓く石川家、働かない父親像、無気力な男性、家出を繰り返す父など、不可解さは増す。とりわけ晩年の一禎にまつわる疑問は見過ごせない。この一禎こそが今後、不可欠な研究テーマではないかと筆者は密かに予感している。

## V. む す び

石川啄木作品が社会に受容され始めてから100余年を経過した。したがって啄木に関する研究も相当な積み上げを見せている。特に国際啄木学会が1989年12月3日に創立されて以降の研究成果は、膨大な量と質にのぼっている。同年は元号で言えば、平成という新たな時代を迎えて間もない頃であった。すでに30年以上の歴史を有していることになる。それらの研究成果だけでも、もはや独立した文化遺産である。

望ましいことか否かは不明であるが、近年は石川啄木自身でも知らないでいただろうと思われる細かな事実までもが明らかにされている。しかも、その内容を多くの他人が知っているというような事態にさえなっている。それほどまでに啄木に関する調査は、深度も範囲も進展してきている。

そのような現実を踏まえると、この度のような試みを開始することは思慮に欠ける行為であったと言えよう。なにぶん当該研究は一個人による。もとより管見に過ぎない情報収集であり、資料批判に過ぎず、その結果による年譜の作成であった。しかし今回のように無謀な目論見であろうとも、将来の研究精度向上や研究テーマ発見への新たな道を照らしてくれるものと筆者自身を慰めている。あくまでも本研究は、ひとつの研究手法を提案した試みとして御覧いただきたい。

そして偏に、これまで啄木研究の先達たちが残してくれた偉大な資産に、こころより深謝する次第である。この拙い試みに対する暖かい御指導を期待するものである。

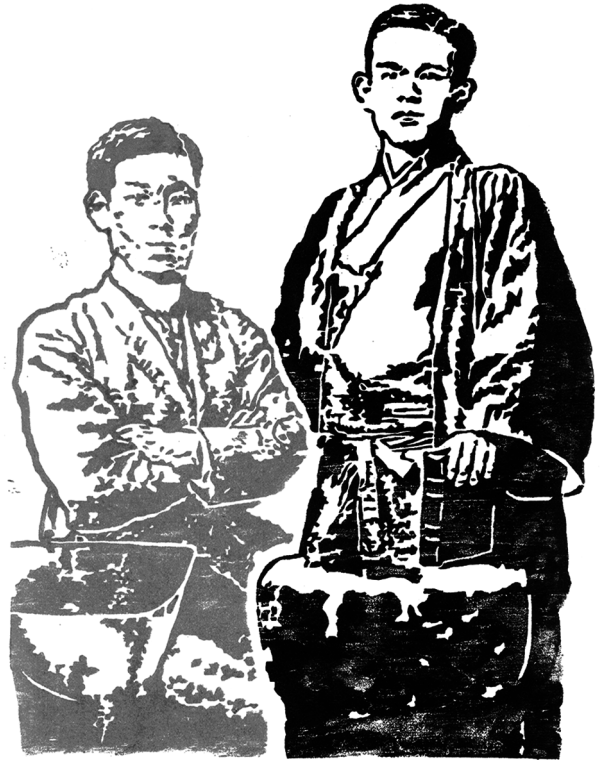


図-5 金田一京助と啄木最期の姿

## IV. 注

- 1) 「石川啄木と若山牧水を育んだ建築物5棟」拙稿、『国際啄木学会会報 第38号』山下多恵子・森 義真 編集, 国際啄木学会 発行, 2020年4月30日, P-10
- 2) 『啄木全集 第5巻 日記(一)』石川啄木, 筑摩書房, 1967年11月25日, P-150
- 3) 『年表で見る モノの歴史事典 上』ゆまに書房 編集・発行, 1995年11月25日
- 4) 一般向けの書物で石川啄木が取り上げられる内容は、いわゆる有名な歌人というだけでなく、恋愛と情熱そして貧しさと死の病にみちた生涯を駆け抜けた人物という視点が多い。たとえば「石川啄木, 愛の流浪」『別冊太陽 日本のこころ26 近代恋愛物語50』高橋洋二 編集, 平凡社 発行, 1979年3月25日, PP. 36-37は妻以外の複数女性の写真を掲載している。「石川啄木」『別冊太陽 日本のこころ24 近代詩人百人』高橋洋二 編集, 平凡社 発行, 1978年9月25日, P-35には「早熟」, 「26歳で没」と記述され、節子の写真も載せられている。「石川啄木」『別冊太陽 日本のこころXI 近代文学百人』馬場一郎 編集, 平凡社 発行, 1975年6月25日, PP. 26-27では啄木と節子が並ぶ写真だけでなく、葬儀の

記事や借金記録表が写真映像で見られる。啄木と啄木夫妻の話題性が、より大きく扱われているように感じられる。本研究は上記のような視点とは異なる

り、啄木夫妻の事実関係を裏付け資料によって改めて見渡そうとする細やかな試みである。